

『偽殉教者』試論

——ジョン・ダンとジェームズ王を中心にして——

(その一)

高 橋 正 平

一序一

1610年に出版されたジョン・ダン (John Donne) の書に『偽殉教者』(*Pseudo-Martyr* がある。1597年国璽尚書トーマス・エジャトン卿 (Lord Thomas Egerton) の秘書になり、宮廷での活躍を夢見ていたダンがエジャトン卿の姪のアン・モア (Anne More) と秘密結婚をする。それがエジャトン卿の怒りに触れ、ダンは秘書を解任され、以後失意の数年を送ることになる。しかしながらなお依然としてジェームズ王朝への登用の野心を秘めていたダンはジェームズ王と (James I) ジェズイットの論争を知り、王を支持する格好の機会を得ることになる。このような状況のもと38才のダンはジェームズ王の注目を一心に得ようと彼のそれまでの学識を誇示するかのごとく400ページにもわたる『偽殉教者』を書き上げる。この書は英国内のカトリック教徒特にジェズイットに向けて書かれたもので、ジェームズ王の「忠誠の誓い」(*The Oath of Allegiance*) を拒否し、自ら死を招くカトリック教徒は真の意味での「殉教者」ではなく、「偽殉教者」であることを論じた書である。一見宗教的テーマを扱っている印象を与える本書は単なる宗教論争にとどまらず、むしろ極めて政治的で、ジェームズ王朝と密接に係わりあい、ダンのジェームズ王支持表明の最初の契機となっている重要な書である。従来本書は400ページに近い大著であるためかダン研究者からはどちらかと言えば敬遠されがちで殆ど論じられてきていない。しかし、ダンとジェームズ王との関係を考えてと本書は決して無視されず、むしろ両者の関係更には人間ダンを論ずるにあたっては避けては通れない書となっている。小論の目的はジェームズ王との関係から『偽殉教者』を論じることであるが、論を進めるにあたり、

最初にジェームズ王の「忠誠の誓い」の問題点を王の『忠誠の誓い擁護』(*An Apologie for the Oath of Allegiance*, 1607年、以下『擁護』と略記)と『キリスト教王、自由君主・国家への通告』(*A Premonition to all Christian Monarchs, Free Princes and States*, 1609年、以下『通告』と略記)から論じ、次にダンの『偽殉教者』へと論を進め、ダンがいかにしてジェームズ王を支持しているかを見ていきたい¹⁾。

1

周知のごとく過激なカトリック教徒のジェームズ王と王妃、王の息子及び国会議員の殺害を目的とした「火薬陰謀事件」(*the Gunpowder Plot*) が発覚したのは1605年11月5日であった。この事件は未遂に終わりはしたものの国王暗殺と言う「恐ろしい、稀な、前代未聞の不実な企て」に驚愕したジェームズ王は将来「同様の危害」を防ぐため国内のカトリック教徒に「忠誠の誓い」を課し、王への忠誠を誓わせることを決意した。以後この「忠誠の誓い」を巡り、英国のローマ・カトリック教会との間に「書物戦争」ともいえるべく論争が生じ、両国の多くの者がこの論争に参加することになった。Lancelot Andrewes の *Tortura Torti* (1609), William Barclay の *De Potestate Papae* (1609), Roberto Bellarmino の *Apologia... pro Responsione sua ad Librum Jacobi* (1609), 及び、ダンの作品の直前の William Barlow の *Answer to a Catholike Englishman* (1609), Humphrey Leech の *Dutifull Consideration...* (1609) と言った具合に続々と「忠誠の誓い」をめぐる論争書が出版されたが、ダンの『偽殉教者』はこれら論争の一環をなすものであった。この「忠誠の誓い」でジェームズ王が国

内のカトリック教徒に要求したのは次の5点であった。

- (1) ジェームズ王は英国及び王の他の領土・国の合法的な王であり、ローマ教皇はいかなる手段によっても王を廃し、王国や領土を処分し、外国君主に英国に侵入したり王や王の国々を苦しめたりする権限を与え、王の臣下に忠誠や服従から開放し、臣下に武器を取り、反乱を起こす許可を与え、王、国家、政府また王の領土内の臣下に危害を加えたりする権力や権限がない。

(IA. B. doe trewly and sincerely acknowledge, professe, testifie and declare in my conscience before God and the world, That our sovereigne Lord King James, is lawfull King of this Realme, and of all other his Majesties Dominions and Countereys: And that the Pope neither of himselfe, by any authority of the Church or Sea of Rome, or by any other meanes with any ot her, hath any power or authoritie to depose the King, or to dispose of any of his Majesties Kingdomes or Dominions, or to authorize any foreigne Prince to invade or annoy him or his Countreys, or to discharge any of his Subjects of their Allegiance and obedience to his Majestie, or give License or leave to any of them to beare Armes, raise tumults, or to offer any violence or hurt to his majesties Royall Person, State or Government, or to any of his Majesties subjects within his Majesties Dominions.)²⁾

- (2) ローマ教皇やその後継者あるいはローマ教皇や教皇座から得られ又は得られると思われている權威によつて王、王の継承者と後継者に対してなされ、認められる破門布告・宣告、王位剝奪、服従免除にもかかわらず、王、王の継承者、後継者に〔英国内のカトリック教徒は〕信義と忠実を抱き、そのような布告・宣言等によつてまたは口実によつて王等、王位、威厳に対してなされるすべての陰謀、殺害計画から力のある限り王等を守り、王、王の継承者、後継者に対して知ったり聞いたりするすべての反逆・陰謀を王等に知らせる。

(Also I doe sweare from my heart, that, notwithstanding any declaration or sentence Exco-

munication, or depriuation made or granted, or to be made or granted, by the *Pope* or his successors, or by any Authoritie deriued, or pretended to be deriued from him or his Sea, against uhe said King, his heires successors, or any absolution of the said subjects from their obedience; I will beare faith and trew Allegiance to his Maiestie, his heires and successors, and him and them will defend to the vttermost of my power, against all conspiracies and attempts what soeuer, which shalbe made against his or their Persons, their Crowne and dignitie, by reason or colour of any such sentence, or declaration, or otherwise, and will doe my best endeueur to disclose and make knowne vnto his Maiestie, his heires and successors, all Treasons and traiterous conspiracies, which I shall koow or heare of, to be against him or any of them.)³⁾

- (3) ローマ教皇によつて破門され、王位剝奪される王は王の臣下によつて又他の誰によつても罷免または殺害されることができるといふ忌まわしい教義と見解を〔英国内のカトリック教徒は〕不敬かつ異端として嫌悪し、放棄する。

(And Id oe further sweare, That I dee from my heart abhorre, detest and abiure as impious and Hereticall, this damnable doctrine and position, That Princes which be excommunicated or depriued by the *Pope*, may be deposed or murdered by their Subiects or any other what-soeuer.)⁴⁾

- (4) ローマ教皇及びいかなる人も「忠誠の誓い」またはそのいかなる箇所をも免除する権限はない。その誓いが十分かつ完全なる權威によつて合法的に施行されていることを認め、誓いとは逆のすべての赦免と特免を放棄する。

(And I doe beleue, and in conscience am resolved, that neither the *Pope* nor any person what-soeuer, hath power to absolue me of this Oath, or any part thereof; which I acknowledge by good and full authoritie to bee lawfully ministred vnto mee, and doe renounce all Pardons and Dispensations to the contrarie.)⁵⁾

(5) 以上のことを曖昧表現の使用、意中回避、秘密保留なしに話される明白な言葉および言葉の明白な普通の意味と理解によって【英国国内のカトリック教徒は】率直に心から認め、誓う。そしてキリスト教徒の真の信仰にかけてこれを心から、進んで、真に認め、承認する。

(And all these things I doe plainly and sincerely acknowledge and sweare, according to these expresse words by me spoken, and according to the plaine and common sene and vnderstanding of the same words, without any Equiuocation, or mentall euasion, or secret reseruatiō what soeuer. And I do make this Recognition and acknowledgment heartily, willinly, and trewly, vpon the trew faith of a Christian.)⁶⁾

以上の誓いによって英国国内のカトリック教徒は「自然な忠誠」に従って忠実に王への服従を続ける決意を明白に公言しなければならなくなる。「忠誠の誓い」の真の狙いはジェームズ王の言葉によれば「善良な臣民一般」(all my good subiects in generall)と「服従から身を引こうとする不実な反逆者」(unfaithfull Traitors, that intended to withdraw themselves from my obedience)を区別するだけでなく、「カトリック教的な感情を抱いているが王への自然義務を保持している臣民」(so many of my Subjects, who although they were otherwise Popishly affected, yet retained in their hearts the print of their naturall dutie to their Sovereigne)と「火薬陰謀者と同じ狂信的熱意に我を忘れ、自然な忠誠の範囲内で自制することができず、多様な宗教が王に対するあらゆる反逆、反乱の安全なる口実であると考えている人たち」(those who being caried away with the like fanaticall zeale that the Powder-Traitors were, could not conteine themselves within the bounds of their natuall Allegiance, but thought diversitie of religion a safe pretext for all kinde of treasons, and rebellions against their Sovereigne)を区別することであった。⁷⁾ ジェームズ王は「忠誠の誓い」を言わば踏み絵にして王に対して忠順なカトリック教徒と反逆心あるカトリック教徒とを区別し、最終的には過激なカトリック教徒の国外追放による国情安定を望んでいたのである。ジェームズ王及びローマ・カトリック教会両陣営にとっての「忠誠の

誓い」の最大の論争点は(3)のローマ教皇によって破門され、王位を剥奪された王は臣下によって廃位され、殺害されうろというローマ側の主張をカトリック教徒は「不敬で異端であるとして心から嫌悪し、誓って放棄することを誓う」(I doe further sweare, that I doe from my heart abhorre, detest and abjure as impious and Hereticall) ことにある。つまりそれはローマ教皇の王への破門及び王殺害というジェームズ王にとっては王の存在ひいてはジェームズ王朝・英国そのものを根底から否定するこへ通ずる内容である。ここに至って「忠誠の誓い」は単なる王への忠誠のみならず、ローマ教皇とジェームズ王の権力争いにまで発展し、どちらが首位に立つのかという問題にまで関係してくる。果たしてローマ教皇はジェームズ王に破門を宣告しえるのか、又王は殺害されうろのか。そもそも「忠誠の誓い」は、ジェームズ王がローマ教皇によって破門されうろローマ・カトリック教の信仰問題に触れるような内容のものなのか。ローマ教皇は「忠誠の誓い」がカトリック教及びカトリック教会全体に関わると公言し、逆にジェームズ王は「忠誠の誓い」を単なる「世俗的な」(temporal)ものとみなし、ローマ教皇には無関係であると主張する。このような論争の中、英国のカトリック教・主司祭ブラックウェル (Blackwell) は「忠誠の誓い」を「一市民に関する」(civil), 「世俗的な」誓いとして受け入れ、更に国内のカトリック教徒にも「忠誠の誓い」を取ることを促す書簡を書くに至った。これに反し、ローマ側は教皇パウロ五世 (Paul V) の2度にわたる教書及び論客ロベルト・ベラルミーノ (Robert Bellarmino) の2度の反論により、「忠誠の誓い」を「一市民に関する」ものとは見なさず、むしろ「ローマ・カトリック教の信仰と教済に全く反する多くの点」(many things which are flat contrary to Faith and salvation)を含んでいると見なし、ジェームズ王は「異端者」であり、ローマ教皇によって廃位されているから英国国内のカトリック教徒は「忠誠の誓い」を拒否できると考え、国内のカトリック教徒に「忠誠の誓い」をとることを禁じた。⁸⁾ このローマ側からの反論に対してジェームズ王が書いたのが『擁護』と『通告』であった。ジェームズ王の「忠誠の誓い」をめぐる、国内のみならず大陸においてもジェームズ王の主張の正当性をめぐり賛否両論が飛びかうことになるが、ジェームズ王とローマ教皇との論争は結局は「忠誠の誓い」が「一

市民に関する」、「世俗的な」ものであるか否かであった。ジェームズ王は、「忠誠の誓い」がローマ教皇の霊的権力に少しも抵触するものでなく、それ故国内のカトリック教徒が「忠誠の誓い」をとることは彼らの信仰に何ら反することはないことを証明することによって「忠誠の誓い」をとるべきか否かについて戸惑いを見せている国内のカトリック教徒を説得することになる。実際国内のカトリック教徒はジェームズ王の「忠誠の誓い」に従えばローマ・カトリック教皇に背くことになり、逆にローマ教皇に従えばジェームズ王に背くことになるというディレンマにあった。それ故、ジェームズ王は『擁護』と『通告』の両書で「忠誠の誓い」が「一市民に関する」、「世俗的な」ものであることを論じなければならない。ジェームズ王は『擁護』と『通告』の中で幾度となくその点を強調し、「忠誠の誓い」はカトリック教徒としてではなく「市民としての服従」(civil obedience)を強いるだけであると言う。ジェームズ王は、君主への自然な忠誠の公言が魂の信仰と救済に全く反していると言うパウロ五世の反論は神学を読んでも理解できず、更には臣民は、その君主が良き君主であろうが、悪しき君主であろうが、良心のために君主に従わなければならないことを聖書で2、3度ならず読んだことがあると言う。

For how the profession of the naturall Allegiance of Subjects to their Prince can be directly opposite to the faith and saluation of soules, is so farre beyond my simple reading in Diuinitie, as I must thinke it a strange and new Assertion, to proceed out of the mouth of that pretended generall Pastor of all Christian soules. I reade indeede, and not in one, or two, or three places of Scripture, that Subjects are bound to obey their Princes for conscience sake, whether they were good or wicked Princes.⁹⁾ 「市民としての」、「世俗的な」「忠誠の誓い」がローマ教皇から反論されることは「奇妙で新しい主張」であるとジェームズ王は言う。伝統主義者であるジェームズ王はこの後旧約聖書、初代教父、及び過去の宗教会議を援用して臣民の君主への服従の正当性を強調する。ヨシュア (Joshua)、エレミア (Jeremy)、「出エジプト記」(Exodus)におけるイスラエル人のファラオ (Pharaoh) への服従、「エズラ書」(The Book of Ezra) のキルス (Cyrus)、ロマ書の「すべての人は上

に立つ権威に従うべきである」を引用しつつ、いかに王への服従が旧約・新約聖書で行われていたかを指摘する。更にはテルトゥリアヌス (Tertullian) 殉教者ユスティノス (Justine Maryr)、アンブロシウス (Ambrose)、オプターテス (Opatus)、グレゴリー (Gregory) といった初代教父達によって君主への服従の正当性を指摘する。宗教会議からはアルル (Arles)、フランクフォード (Frankford)、トゥール (Tours)、シャロン (Chalons)、メンツ (Ments)、リームズ (Rhemes)、ニース (Nice)、コンスタンティノーブル (Constantinople)、エベソ (Ephesus)、カルケドン (Chalcedon) 宗教会議を引き合いにだし、それぞれの会議での君主に対する服従の決議を取り上げ、君主への服従に関しては何ら問題はないことを示唆する。¹⁰⁾ このような旧・新訳聖書、初代教父、宗教会議から考え、ジェームズ王は、パウロ五世の世俗君主への世俗的服従が信仰、魂の救済に反しているという反論はキリスト教界においてはいまだかつて聞かれたことも読まれたこともなく、パウロ五世が初めて「信仰簡条」にしたと言う。

And I euer held it for an infallible Maxime in Diuinitie, That temporall obedience to a temporall Magistrate, did nothing repugne to matters of faith or saluation of soules: But that euer temporall obedience was against faith and saluation of soules, as in this *Breue* is alledged, was neuer before heard nor read of in the the Christian Church. And therefore I would haue wished the *Pope*, before hee had set downe this commandement to all Papists here, That, since in him is the power by the infallibility of his spirit, to make new Articles of Faith when euer it shall please him; he had first set it downe for an Article of Faith, before he had commended all Catholikes to beleeeue and obey it.¹¹⁾

ジェームズ王が個人的嫌悪感に近い態度で更に一層徹底的に反論する相手は「ジェズイット最大の権威者の一人」で「論争の偉大かつ有名な作者」であり、「(ジェズイットのジェームズ王への) 扇動のふいごを吹き、反乱に拍車をかける」¹²⁾ とジェームズ王が評したベラルミーノである。『擁護』でジェームズ王は英国のローマ・カトリック教主席司祭ブラックウェル

へのベラルミーノの書簡を取り上げ、ハウロ五世への反論以上の紙数を割き、更に『通告』ではすべてをベラルミーノ反論にあて、末尾にはリストを作成してまでベラルミーノを批判している程である。ベラルミーノが論争に加わるまでジェームズ王とローマ教皇との優位に関してはそれ程論じられる事はなかった。しかしベラルミーノが「忠誠の誓い」によって英国における教会の首長の権威が聖ペテロの後継者からヘンリー八世の後継者に移され、「忠誠の誓い」をとる人は「教皇座の首位権」(the Primacie of the Apostolicke Sea)を不実にも否定せざるをえないと言いだしたとき、¹³⁾ ジェームズ王とローマ教皇との優位をめぐる急速に論議がなされることになる。パウロ五世に反論していたときジェームズ王はその問題には意図的に触れることを避けていたが、ベラルミーノが論争に加わってからにわかにその問題がクロズ・アップされ、ジェームズ王もその問題を無視できなくなってきた。ベラルミーノからすればパウロ五世の「忠誠の誓い」に対する警告を無視してまで誓いをとる者は教皇よりも王に従っているのである。しかしベラルミーノはそもそも「忠誠の誓い」を論じるべきなのに「国王至上の誓い」(the Oath of Supremacy)を取り上げているのである。この誓いは言うまでもなく英国王を国教主権者とし、ローマ教皇の主権を否認しているからである。ジェームズ王によれば「国王至上の誓い」ではローマ・カトリック教徒とプロテスタントを区別することがその目的であったが、「忠誠の誓い」では「市民として従順なカトリック教徒」(the civilly obedient Papists)と「火薬・反逆の強情な弟子」(the perverse disciples of the Powder-Treason)を区別することがその目的であって、¹⁴⁾ ベラルミーノの書簡は、カトリック教徒が聖ペテロの後継者の権威を否定しなければならないことそしてその代わりにヘンリー八世の後継者を認めねばならないことへの非難に関係している。確かに「国王至上の誓い」をジェームズ王は引用しているがそこでは教会関係者のみならず一般市民の裁判官となる王の絶対権力が含まれ、王の領土内で裁判官となる外国の権力者や君主を除外している。しかるに「忠誠の誓い」では「単なる世俗的な事柄における君主に対しての臣民の市民としての服従」(the civil obedience of Subjects to their Sovereigne, in meere temporall causes)を扱っているにすぎないと言う。¹⁵⁾ そして「忠誠の誓い」をとらない者は以下の

14項目を受け入れなければならない。

1. 私ジェームズ王はこの王国[英国]と他のすべての私の領土の正統な王ではない。

(That I King IAMES, am not the lawfull King of this Kingdome, and of all other my Dominions.)

2. 教皇は彼自身の権威によって私[ジェームズ王]を廃位できる。彼自身の権威によってできないとしても、教会又は教皇職のある他の権威によって、教会又は教皇職のある他の権威によってできないとしても、他の援助をえて他の手段によって、彼[教皇]は私を廃位できる。

(That the *Pope* by his owne authoritie may depose me: If not by his owne authoritie, yet by some other authoritie of the Church, or of the Sea of *Rome*: If not by some other authoritie of the Church and Sea of *Rome*, yet by other meanes with others helpe, he may depose me.)

3. 教皇は私の王国と領土を処分できる。

(That the *Pope* may dispose of my Kingdomes and Dominions.)

4. 教皇は外国君主に私の領土侵略の権限を与えることができる。

(That the *Pope* may giue authoritie to some forreine Prince to inuade my Dominions.)

5. 教皇は私の臣民から彼らの私に対する忠誠と服従を免ずることができる。

(That the *Pope* may discharge my Subjects of their Allegiance and Obedience to me.)

6. 教皇は私の一人かそれ以上の臣民に私に対して武装する認可を与えることができる。

(That the *Pope* may giue licence to one, or more of my Subjects to beare armes against me.)

7. 教皇は私の臣民に対して私の身体、政治体制、幾人かの私の臣民に暴力を加える許可を与えることができる。

(That the *Pope* may giue leaue to my Subjects to offer violence to my Person, or to my gouvernement, or to some of my Subjects.)

8. 教皇が宣告により私を破門し廃位するならば、私の臣民は私に対し信義と忠誠を抱かなくてもよ

い。

(That if the *Pope* shall by Sentence excommunicate or depose mee, my Subjects are not to beare Faith and Allegiance to me.)

9. 教皇が宣告によって私を破門し廃位するならば、私の臣民は私の身体、王位をできうるかぎり守る義務はない。

(If the *Pope* shall by Sentence excommunicate or depose me, my Subjects are not bound to defend with all their power my Person and Crowne.)

10. 教皇が私に対して破門・王位剥脱宣告を発するならば、私の臣民はその宣告によって彼らが聞き、知るにいたる私への陰謀・反逆を明らかにする義務はない。

(If the *Pope* shall giue out any Sentence of Excommunication or Depriuation against me, my Subjects by reason of that Sentence, are not bound to reueale all Conspiracies and Treasons against mee, which shall come to their hearing and knowledge.)

11. 教皇によって破門される君主はその臣民かあるいは他のいかなる人によっても廃位され、殺害されうると考えることは異端的でもないし憎むべきことでもない。

(That it is not hereticall and detestable to hold, that Princes being excommunicated by the *Pope*, may be either deposed or killed by their Subjects, or any other.)

12. 教皇はこの〔忠誠の〕誓いから又そのある箇所から私の臣民を放免する権限をもっている。

(That the *Pope* hath power to absolue my Subjects from this Oath, or from some part thereof.)

13. この〔忠誠の〕誓いは十分かつ正統な権威によって私の臣民には施行されていない。

(That this Oath is not administred to my Subjects, by a full and lawfull authoritie.)

14. この〔忠誠の〕誓いは曖昧表現、心的回避、意中留保によってとることができる。そして誠実にキリスト教徒の真なる信義のなかにみられる心と善意によって〔忠誠の誓いを〕とらなくてもよい。(That thsi Oath is to be taken with E-

quiucation, mentall euasion, or secret reseruatiō; and not with the heart and good will, sincerely in the trew faith of a Christian man.¹⁶⁾

以上の事柄は「霊的な問題における教皇の主権」(the Popes Supremacie in Spirituall causes) には関係なく、¹⁷⁾ 宗教会議によって教皇の権威に属すると決定されたり、明確にされたりしたことはなかったし、又教皇派学者達もそれらについては和解できないほど争い、衝突している。ジェームズ王は「忠誠の誓い」は「英国の新しい発明」(any new invention of our owne) ではなく「神の声」によって保証されているとする。¹⁸⁾ 更にはジェームズ王は「忠誠の誓い」が1千年前の同様の主旨の誓いに従っており、過去の宗教会議がそれを非難することはせず、逆にそれを勧めさえしたと言っている。¹⁹⁾ 世俗の君主への世俗の服従を強いる「忠誠の誓い」はカトリック教の信仰や聖ペテロの継承権、教皇座、カトリック教会の教権制度(Hierarchy) には全然触れておらず、純粋に「市民的」で「世俗的」であると繰り返し主張する。ベラルミーノへの反論の最後にジェームズ王は、王の主権がその領土内においては神の声によってキリスト教王の真の正しい任務であると断言されるとして、旧約・新訳聖書からいかに王が自国内では教会を支配していたかを例証し、王や王制に反対するベラルミーノに対して王の優位を主張する。彼の説明によれば、旧約聖書では王はその領土内では教会の統治者であり、領土内の腐敗を清め、悪習を改め、神殿を作り、神と民衆との契約を改めたことなどを挙げ、王は「神の息子、否、神自身」とさえ呼ばれたと言い、地上における神としての王を強調する。²⁰⁾ これに対しベラルミーノは聖書で神に与えられた「光栄ある地位、呼称、特権」を真っ向から否定し、反王権的立場をとるが、それは「神の書」聖書には見られないことだとジェームズ王は反論する。更に、ベラルミーノの著作から反王権的な箇所を12項目にわけて引用する。²¹⁾

『擁護』の最後に至り、ジェームズ王は「忠誠の誓い」をめぐる最大の問題点・論争点が王とローマ教皇の優位権争いであることを明らかにする。「忠誠の誓い」に対する賛否は言うなれば王制を支持するのかそれとも否定するのかの問題に帰着する。ジェームズ王にとっては言わばジェームズ王朝の存亡に係わるこの問題を論じることなしにはカトリック教会への反論は十分とは言えない。ベラルミーノへの反論の最後にそ

の反王権的な立場を明確にしようとしたジェームズの意図には今や時代遅れとなりつつあった絶対王政に対する王のかたくなまでの盲信があった。確かに「忠誠の誓い」ではジェームズ王は言葉巧みにカトリック教の信仰問題に関しては触れないようにしていたが、カトリック教徒からすれば「忠誠の誓い」をとることはローマ教皇の否認に通ずることは目に見えていた。従順なカトリック教徒にとっては王か教皇かの板挟みにあった訳であるが、ジェームズ王としては国内の平静を維持するためには「忠誠の誓い」はどうしても不可欠であった。「忠誠の誓い」の背後にはジェームズ王の現状の体制維持の姿勢が強く反映されており、ベラルミーノの反王権的見解を持ち出した意味は十分に理解できるところである。ベラルミーノの上記の反王権的立場を示す最後の項目からも明らなように、君主への服従は「良き秩序と慣習を守るため」である。²²⁾ そのために「忠誠の誓い」はどうしても必要であることをジェームズ王は強調する。王と教皇との優位をめぐる論争は『擁護』で終わるのではない。次の『通告』では『擁護』以上にこの問題が論じられることになる。次に『通告』を見てみよう。

2

ジェームズ王の「忠誠の誓い」の後ベラルミーノはトルトゥス (Tortus) という匿名で *Responsio* を出版し、「忠誠の誓い」が霊的問題を扱い、教皇の支配権への侵害であり、王への破門権と王の臣民の霊的幸福の監督権により、教皇は王への間接的廃位権があること、「忠誠の誓い」は「国王至上の誓い」(the Oath of Supremacy) に他ならないこと、王権神授説の否定及び民衆からの権力委譲としての王権を主張する。このようなローマ・カトリック教会側の主張が最高支配者としての君主の権利への脅威であることをヨーロッパの諸君主へ示したのが『通告』であった。ここに至り、王と教皇との優位権が『擁護』以上に明確に提示され、「忠誠の誓い」に端を発した論争が政治的なレベルへと発展していくことになる。以下『通告』のほとんどが所々本題から逸脱することがあるが、この王と教皇のどちらが優位にたつのかの問題をめぐる展開していく。ローマ側からすれば教皇の王廃位権の否定は君主への教皇の破門権の否定であり、それは明らかにカトリック教徒としての信仰に反するというの

であるが、ジェームズ王は世俗的な問題においてはそもそも教皇に王廃位権はないとする。「忠誠の誓い」はあくまで世俗的であると主張するジェームズ王にとって教皇の廃位権は全く承服できないことである。自然な忠誠、市民としての世俗的な服従の公言だけしか「忠誠の誓い」では要求されていないとジェームズ王は繰り返す。ローマ側との論争は結局王の俗権への教皇の侵害に他ならず、その侵害は「あらゆる聖書、古代宗教会議、教父の保証」(the warrant of all Scriptures, ancient Councils and Fathers) に反するといふ。²³⁾ ベラルミーノはジェームズ王の「忠誠の誓い」の主要な二点、即ち「忠誠の誓い」が自然な君主に対して臣民によって当然与えられべき市民としての世俗的な服従に関係していること、及び君主の俗権へのパウロ五世の侵害は聖書、古代宗教会議、教父の規則に反する、という点について反論していない、とジェームズ王は言う。²⁴⁾ 前者に対してベラルミーノは「忠誠の誓い」が王廃位権を否定しているからそれは教皇の破門権を直接否定していると述べ、後者に対しては新訳聖書の「私の(キリスト)羊を養いなさい」(Pasce oues meas) と「私(キリスト)はあなた(ペテロ)に天国のかぎを授けよう」(Tibi dabo claves regni Caelorum) を引き合いに出し、それらの解釈によって教皇の好むがままに王を王位につかせたり廃位させたりする十分な権力を教皇に与えている。そして君主への教皇の俗権をカトリック信仰箇条の一つにしているのである。²⁵⁾ これに対してジェームズ王は次のように過去のヨーロッパのキリスト教皇帝・君主がいかに教皇の俗権を認めなかったか否教皇を創り、支配し、廃位させたかそして英国内でもジェームズ王の前任者が教皇に抵抗したかを強調する。

Yee shall first see how farre other Godly and Christian Emperours and Kings were from acknowledging the Popes temporall Supremacie ouer them; nay, haue created, controlled and deposed Popes: and next, what a number of my Predecessors in this Kingdome haue at all occasions, euen in the times of the greatest Greatnesse of Popes, resisted and plainly withstood them in this point.²⁶⁾

そしてすべてのキリスト教皇は長い間教皇の優位を認めず、逆に教皇は自らを皇帝の「臣下」(Vassal) として認め、皇帝を君主 (Lord) として、皇帝に服従し

たと言う。

And first, all Christian *Emperours* were for a long time so farre from acknowledging the Popes Superioritie ouer them, as by the contrary the Popes acknowledged themselves for their *Vassals*, reuerencing and obeying the *Emperours* as their *Lords*, for prooffe whereof, I remit you to *Apologie*.²⁷⁾

さらにジェームズ王は教皇創造、教皇選挙への皇帝の同意、皇帝による教皇廃位、教皇の世俗的優位の王による否定、にそれぞれ関して過去の歴史にさかのぼって反論する。²⁸⁾ ジェームズ王の反論方法はこれまで見たように過去の歴史と聖書であるがここでもジェームズ王はその方法を十分に利用している。たとえば教皇廃位に関してはオット (Ottho) 皇帝による教皇ヨハネ (John) 十二世の廃位、ヘンリー皇帝三世 (Henry) によるベネディクト九世 (Benedict), シルヴェスター三世 (Silvester), グレゴリ六世 (Gregorie) の廃位を例にあげている。²⁹⁾ このほかにもジェームズ王はフランス王とフランス教会の教皇への俗権拒否、及び俗権に干渉するごとに教皇に抵抗した「フランスカトリック教会の権利」(Gallican Immunitie) に言及している。そして過去の英国の歴代の王を振り返り、いかに彼らが教皇の俗権に抵抗したかを次のように述べている。

And now pretermittin all further examples of forraigne Kings actions, I will onely content me at this time with some of my owne Predecessors examples of this kingdome of England; that it may thereby the more clearly appeare, that euen in those times when the world was fullest of darkened blindnes and ignorance, the Kings of England haue oftentimes, not onely repined, but euen strongly resisted and withstood this temporall vsurpation and encroachment of ambitious Popes.³⁰⁾

そしてジェームズ王のローマ教皇に対しての態度が少しも新しいことなく過去のキリスト教皇帝、王特に英国のジェームズ王の前任の諸王に照らして見ても、何ら新しい事ではないと言う。

By these few examples now (I hope) I haue sufficiently cleered my selfe from the imputation, that any ambition or desire of Noueltie

in mee should haue stirred mee, either to robbe the *Pope* of any thing due vnto him, or to assume vnto my selfe any farther authoritie, then that which other Christian *Emperours* and *Kings* through the world, and my owne Predecessours of *England* in especiall, haue long agoone maintained.³¹⁾

このようにジェームズ王は俗事に関して徹底的にローマ教皇に抵抗し、ローマ教皇のジェームズ王への干渉、王の権利侵害に関して過去の歴史を盾に反論する。事の発端は「忠誠の誓い」であったがジェームズ王は王と教皇との主導権争いの他に様々な問題を扱い、時には論争から逸脱することもしばしばあるが、しかし問題はあくまでも「忠誠の誓い」をめぐるカトリック教徒がそれを拒否できるか否かなのである。客観的に見てジェームズ王の「忠誠の誓い」が純然とした世俗的な内容で全くローマ教皇・教会に関係していないかと言うとこれは疑わしい問題である。確かに王の「忠誠の誓い」を王が主張するように「市民的な」「世俗的な」ものと見なすか否かが王側とローマ・カトリック教会側とのそもそもの論争の大きなギャップであった。論争の始まりからして両者は既に歩みよることなく平行線を辿っているのである。それ故「忠誠の誓い」を拒否すればそれがジェームズ王に背き、誓いをとればローマ教皇に背くことは明らかである。ジェームズ王はそのような紛らわしい問題点を回避するために「忠誠の誓い」が全く市民に関するもので世俗的なものであると言うがジェームズ王の主張がどの程度までカトリック教徒を説得せしめたかははなはだ疑わしいところである。ジェームズ王は過去の歴史、聖書に依拠して自己の主張の正当性を擁護するわけであるがジェームズ王からすればそのような十分な動かしがたい証拠があるのになぜ教皇がキリストの代理人、地上の神、天、現世、地獄の王、全世界の審判者、信仰の首長、論争の絶対的決定者、霊的・世俗的権力の両方の権力を把握しているのか、皇帝や王よりなぜすぐれているのか、全く理解しきれないことなのである。だから教皇の王への優位を認めようとするならば世界は逆さまにならなければならないと言う。

But how they are now come to be *Christs* Vicars, nay, Gods on earth, triplecrowned, Kings of heauen, earth and hell, Iudges of all the world, and none to iudge them; Heads of

the faith, Absolute deciders of all Controuersies by the infallibility of their spirit, hauing all power both Spirituall and Temporall in their hands; the high Bishops, Monarches of the whole earth, Superiours to all Emperours and Kings; yea, Supreme Vice-gods, who whether they will or not cannot erre: how they are now come (I say) to the toppe of gretnesse, I know not: but sure I am, wee that are Kings haue greatest neede to looke vnto it. As for me, *Paul* and *Peter* I know, but these men I know not: And yet to doubt of this, is to denie the Catholique faith; Nay, the world it selfe must be turned vpside downe, and the order of Nature inuerted (making the left hand to haue the place before the Right, and the last named to bee the first in honour) that this primacie may bee maintained.³²⁾

ベラルミーノが教皇の王への優位と教皇の聖と俗にわたる二つの権力に擁護の際に取りあげた「わたし(イエス)の羊を養いなさい」(*Pasce oues meas*)と「わたしは(イエス)はあなたに(ペテロ)に(天国の)かぎを授けよう」(*Tibi dabo clauis*)に関してその解釈は「恥知らずの歪曲」(*shamelessee wresting*)であるという。³³⁾ この問題についてはジェームズ王は次のように述べ、ベラルミーノの解釈を批判している。

And as for these two before cited places, whereby *Bellarmino* maketh the Pope to triumph ouer Kings: I meane *Pasce oues*, and *Tibi dabo clauis*:³ the Cardinall knowes well enough, that the same words of *Tibi dabo*, are in another place spoken by *Chrisi* in the plurall number. And he likewise knowes what reason the Ancients doe giue, why *Christ* bade *Peter* *pascere oues*: and also what a cloude of witnessses there is both of Ancients, and euen of late Popish writers, yea diuers Cardinals, that do all agree that both these speeches vsed to *Peter*, were meant to all the Apostles represented ini hs person:³⁴⁾

ベラルミーノは教皇の王への優位を主張するにあたり、更に世俗君主への教会人の服従免除と民衆が王よりも優位にあるという論理を展開する。特に後者の民

衆により王は創られるという理論はジェズイットの反王権説を支える重要な基盤となり、ジェームズ王の王権神授説とは真っ向から対立するものである。その理論によってベラルミーノは、民衆が王より上位にあり、王権はもともとは民衆から委託されたもので、王は委託された権力をただ一時的に行使しているだけで、もし王が民衆の意に沿わなかったり越権的行為をした場合王は民衆によって殺害されうるという理論を展開したのである。王権が民衆に由来するというジェズイットの理論は当時各国の君主に計り知れない恐怖を与え、いつ何時ジェズイットによって彼らは殺害の対象になるかもしれない。現にジェズイットによる王殺害が各地で行われたこともあって、ジェームズ王も内心穏やかではなかったはずである。このような理論がジェズイットの王への反逆の基盤となっていることをジェームズ王は次のように言う。

And as for the setting vp of the People aboue their owne naturall King, he (bringeth in that principle of Sedition, that he may thereby proue, that Kings haue not their power and authoritie immediatly from God, as the Pope hath his: For euery King (saith he) is made and chosen by his people; nay, they doe but so transferre their power in the Kings person, as they doe notwithstanding retaine their habituall power in their owne hands, which vpon certaine occasions they may actually take to themselues againe. This, I am sure, is an excellent ground in Diuinitie for all Rebels and rebellious people, who are hereby allowed to rebell against their Princes; and assume libertie vnto themselues, when in their discretions they shall thinke it conuenient.³⁵⁾

ジェームズ王はジェズイットの民衆優位の理論に対して聖書から反論するがこの説が彼らの王への反乱・反逆の大きな理論的支柱となっていたことは否定できない。民衆優位の理論が究極的にはジェームズ体制の破壊ひいては英国の混乱へと至ることは言うまでもない。絶対王政が徐々にその地位を失い、いわゆる民衆重視の政治へと移行するのは歴史の流れから見てもはや避けられない、止めることの出来ない事実であった。ジェームズ王の王権神授説はそのような歴史の流れに逆らうようなものであったが、見方を変え、王に

対して好意的に考えればいかにジェームズ王が時代の流れに反してまでも英国の秩序・平和を願っていたかの表れでもあろう。「忠誠の誓い」に端を発した論争でジェームズ王が証明したかったのはパウロ五世及びベラルミーノに対して、「忠誠の誓い」が「市民に関する」、「世俗的な」誓いであり、カトリック教徒の信仰問題には全然干渉していないこと、又、王は自己の領土内では教皇の下位にはないこと、であった。ジェームズ王の反論は聖書と歴史に依っており、「忠誠の誓い」への非難は聖書、歴史のいずれからも立証されえず、他国の「市民に関する」、「世俗的な」「忠誠の誓い」に干渉し、最後にジェームズ王はローマ教皇に服従すべきだと反論し、ジェームズ王に異端者の格印を押し、カトリック教徒は「忠誠の誓い」を拒否できるとするローマ教皇こそが異端者なのであるとする。ジェームズ王の「忠誠の誓い」をめぐる論争は又つきつめればローマ教皇にジェームズ王を廃位する権力があるのか、英国内のカトリック教徒が「忠誠の誓い」を拒否した場合彼らは殉教者となるのかの問題でもある。カトリック教徒は「忠誠の誓い」に従えばローマ教皇の命令に反することになり、ローマ教皇の命令に従えばジェームズ王からは「反逆者」と見なされるディレンマのなかにあった。ダンが『偽殉教者』を発表したのはそのような「忠誠の誓い」をとるべきか否かについて明確な態度を示すことができないでいるカトリック教徒に「忠誠の誓い」をとることはローマ教皇の権限やローマ・カトリック教の信仰には何ら背くことではないことを説き、合せてジェームズ王支持の立場を打ち出すことであった。ではダンはどうにそれをおこなっているのか次に見てみたい。

3

ジェームズ王の下で官職を得ようとする者は誰でも「忠誠の誓い」を擁護する書を書かねばならないことになっていたことは野心ある者達の間では暗黙の了承であった。ジェームズ王も『通告』のなかで彼の臣下がローマへの反論を試みることを疑っていないと言っている。³⁶⁾ それ故、当然のことながら『偽殉教者』はジェームズ王の主張にそって王を擁護するものであることは十分予想できることである。『偽殉教者』は12章からなるがその序文をみればダンが本書で何を論じようとしていたかが理解できよう。そこでダンは『偽

殉教者』の目的は「教会の統一と平和」(the unity and peace of the Church)であるという。³⁷⁾ そして序文全体でローマ教皇の「世俗的支配権」を扱い、それを否定していることから明らかに、ダンは「忠誠の誓い」を世俗的なものとみなし、一国の世俗的な問題にまで介入するローマ教皇の行為は言わば俗権行使による越権行為であり、本来ローマ教皇にはそのような俗権はないのだと言う立場を明確にする。ダンの論争の起点はまさにこのローマ教皇の「世俗的支配権」にあると言っても過言ではない。この問題を論じ、反駁することがダンの本書における第一の目的なのである。ダンにとってはローマ教皇の世俗的支配権はローマ教会の「病氣」であり、³⁸⁾ 本来はそのような権力はローマ教皇にはなかったのである。ダンは本書で幾度か「平和に、宗教的に生きること」(to live peaceably and religiously)³⁹⁾ とか「平和的、宗教的存在」(Peaceable and Religious being)⁴⁰⁾ とか「平和的、宗教的平静 (Peaceable and religious Tranquility)⁴¹⁾ という表現を使用しているが、ローマ側の世俗的支配権は言わばそのようなダンの理想を根底から覆すことになる。ダンはキリスト教の機構と基礎全体は君主と聖職者の分裂によってゆるぐというが、⁴²⁾ ダンは政教の分離を認めていない。ダンは世俗的支配権をローマ教会の信仰箇条とは見なさず、信仰箇条と支配権は区別しなければならぬとする。忘れてならないのはダンは決してカトリック教を否定するのではなく、本来の霊的領域をこえてまで世俗的支配権と言う俗事に介入する行為に対して異を唱えているということである。国内の政治、宗教上の安定・平静を望むダンにとってローマ教皇の世俗的支配権は「反逆の直接の根源」(the immediate parent of Treason)である。⁴³⁾ それ故ローマ教皇の世俗的支配権は否定されなければならない。もしそれを認めれば国内の平和、秩序は成し遂げられなくなり、ジェームズ王朝の崩壊を引き起こすことにもなりかねない。何よりも英国の政情安定を願うダンにとってこのローマ教皇の世俗的支配権はどうしても容認できない問題である。ダンが『偽殉教者』の序論でまず最初にローマ教皇の世俗的支配権を論じるに至った経緯はジェームズ王朝の安定を擁護しなければならないダンにとってはいかに避けては通れない重要な問題であるかを物語っている。ダンは世俗的支配権はもともとローマ教皇にはなかったというが、いかにして世俗的支配権がローマ教皇に入ってきたのか

は説明の出来ないことだと言う。ところがいつのまにか世俗の支配権はローマ教会の信仰箇条になってしまったのである。ローマ教会は本来取るべき「霊的な食べ物」(spirituall foode)⁴⁴⁾ではなく世俗の支配権という食べ物で腹を満たしている。だからそのために死んでもそれは信仰のための死ではなく、「不当な権利侵害」のための死なのであり「殉教」の名に値はしない。それは「偽殉教」の名にこそふさわしい行為である。⁴⁵⁾ ダンの『偽殉教者』のタイトルの意味するところはカトリック教の信仰とは無関係の「忠誠の誓い」を取らないカトリック教徒は反逆者、反抗者であり、そのために死を選んでも真の意味での「殉教者」とはならず、「偽殉教者」となるにすぎないということなのである。事実「忠誠の誓い」を拒否した一部過激なカトリック教徒がいた。それがジェズイットである。ダンは本書で特にジェズイットを攻撃・非難するわけであるが、何よりもジェームズ王朝ひいては英国内の平和・秩序を願う者にとって国家と教会の破壊をもたらすジェズイットは最大の敵であり、どうしても排除しなければならない相手であった。⁴⁶⁾ ダンは『偽殉教者』を展開するにあたり、ジェームズ王朝にとって論理と実践における強敵たるジェズイットを取り上げ、彼らに反論を加えるが、それによっていかに彼らがジェームズ王朝を混乱におとし入れているかをダンはず第一に示したかったのである。彼らジェズイットは殉教者と称して事もあろうに「忠誠の誓い」を拒否し、自ら死を選んでいるのである。そのようなジェズイットを批判してダンは次のように言っている。

From you (the Jesuits) also have come the subtile whisperings of Rebellious doctrines, the frequent and personall trayterous practises, the intestine Commotions, and the publique and foraine Hostile attempts,...⁴⁷⁾

「反抗的教義」(Rebellious doctrines),「頻繁な個人的反逆的实践」(the frequent and prsonall Trayterous practises),「国内騒動」(the intestine Commotions),「社会に対しかつ外国からの敵対攻撃」(the publique and foraine Hostile attempts),これらの語句はいかにジェズイットが当時過激な一派であったかを明白に示している。ジェズイットはジェームズ王朝にとっては何が何でも絶対に阻止せねばならない相手であり、もしかれらの殉教を認めればジェームズ王朝ひいては英国が大混乱に陥ることは目に見えてい

る。彼らジェズイットは特に殉教を偏愛し、「忠誠の誓い」を拒否し、自らを死へと追いやったのである。なぜ彼らがそのようなことをするのかについてダンは次のように述べる。

In three things especially they (the Jesuits) seeme to me, to aduance and foment this corrupt inclination. *First*, by abasing, and ailing the Dignitie and persons of secular Magistrates, by extolling Ecclesiasticke immunities and priviledges: *Secondly*, by dignifying and ouer-valewing our merits and satisfactions, and teaching that the treasure of the Church, is by this expence of our blood increased. And thirdly, by the Doctrine of *Purgatorie*, the torments whereof are by this suffering said to be escaped and auoided.⁴⁸⁾

(1)教会免除と特権の賞揚による世俗君主の威厳と人格の軽視によって、(2)功德と罪の償いに威厳を与え、それらを過大評価し、教会の宝庫が血を失うことによって増加されると教えることによって、(3)煉獄の苦痛は苦しむことによって逃れられ、避けられるという煉獄の教義によって、殉教という「この腐敗した傾向」をジェズイットは助長しているとダンは考える。それゆえダンの『偽殉教者』における意図はまず最初に殉教の上記の三つの要因に反論を加え、論破することにある。それが自ずとジェームズ王の「忠誠の誓い」擁護に至るのである。最初の君主軽視であるが、ジェームズ王のベラルミーノへの反論からも明らかなように、ジェズイットは君主の権力を民衆からの委譲と考えている。ジェズイットのこの見解をダンは十分に知っており、例えば次のように言っている。

The way therefore to finde, what Obedience is due to a King, is not te feeke out, how they which are prefum'd to haue transferr'd this power into him, had their Authoritie, and how much they gaue, and how much they retain'd:⁴⁹⁾ 又、次のようにも言っている。

Nor is secular authority so *mediate*, or dependant upon men, as that it may at any time be extinguished, but must ever reside in some forme or other.⁵⁰⁾

これに対しダンはローマ教会側にすら王権神授説を主張した者がいると言う。

And because the *Clergie* of the *Roman* Church, hath with fo much fierce earnestnesse and apparance of probablenesse, pursued this Assertion, That *that Monarchall forme, and that Hierarchie, which they haue, was instituted immediately from God*; Many wise and ieous *Aduocates of Secular Authoritie*, fearing least otherwise they should diminish that Dignitie, and fo preuaricate and betray the cause, haue said the same of *Regall* power and Iurisdiction. And euen in the *Romane* Church a great Doctor of eminent reputation there, agrees (as he sayes) *Cum omnibus sapientibus, That this Regall Iurisdiction and Monarchie* (which word is so odious and detestable to *Baronius*) *proceedes from God, and by Diuine tand naturall Law, and not from the State or altogether from man*. And as we haue it in *Evidence*, so we haue it in *Confession* from them, that *God hath as immediately created some Kings, as any Priests*. And *Cassanaeus* thinks this is the highest *Secular Aathoritie* that euer God induced: For he denies *That old or new Testament have any mention of Emperour*.⁵¹⁾

そして王権が民衆によって左右される見解に異を唱え次のように言う。

Regall authority is not therefore deriued from men, fo, as at that certaine men haue lighted a king at their Candle, or transferr'd certaine *Degrees of Iurisdiction* into him: and therefore it is a cloudie and muddie search, to offer to trace to the first roote of *Iurisdiction*, since it growes not in man.⁵²⁾

そしてあらゆる権力は神に由来すると言う。

Certainely all power is from God; And as if a companie of *Sauages*, should consent and concurre to a ciuill maner of liuing, *Magistracie*, & *Superioritie*, would necessarily, and naturally, and Diuinely grow out of this consent (for *Magistracie* and *Superioritie* is so naturall and so immediate from God, that *Adam* was created a Magistrate, and he deriu'd *Magistracie* by ge-

neration vpon the eldest Children, and (as the Schoolemen say) if the world hadc ontinued in the first Innocency, yet there should haue beene *Magistracie*.) And into what maner and forme soeuer they had digested and concocted this *Magistracie*, yet the power it-selfe was *Immediately* from God.⁵³⁾

更に次の一節でははっきりと王権神授説に言及している。

So that, that which a *Iesuite* said of the Pope, That the *Election doth onely present him to God*, wee fay also of a King; That whatfoeuer it be, that prepares him, and makes his Perfon capable of *Regall Iurisdiction*, that onely presents him to *God*, who then inanimates him with this Supremacy immediately from himself, according to a secret and tacite couenant, which he hath made with mankind, That when they out of rectified Reason, which is the Law of Nature, haue begot fuch a forme of *Gouernement*, he will infuse thia Soule of power into it.⁵⁴⁾

このようにダンにはジェズイットの王権軽視に対してジェームズ王同様王権神授説を唱え、君主への軽視は誤りであると主張する。

次に功德 (merit) であるが、これは言わば殉教という「善行」(good work) によって教会の宝庫が増すとジェズイットは考えている。これに対し、ダンはキリストの受難を軽視し、功德という「善行」だけで天国に行けるジェズイットを批判して次のように言う。

But for that Merite, which you (the Catholics) teach, to say *That our workes of their owne nature, without considering any Couenant or Contract with GOD, deserue Heauen*, dooth not onely diminish *CHRISTS* Passion, by associating an Assiftant to it, and determine his Priesthood, which is euerlasting, by vfurping that office ourselues, but it preserres our worke before his, because if wee could consider the passion of Christ, without the eternall *Decree*, and *Couenant*, and *Contract* with his father, his worke (sauing the dignity which it had by

Acceptation, by which the least step of his humiliation might worthily haue redeemed tenne thousand worlds) had not naturally merited our saluation.⁵⁵⁾

又、次の引用文では善行だけでは天国には行けず、原罪で汚れた我々に善行はできないと言っている。

...no good worke is naturally large enough to reach heauen, no promise nor acceptation of God hath changed the nature of a good worke: And lastly, we can do no perfit good work; for originall sin hath poisoned the fountaines, our hearts: and thofe degrees and approaches, which we seeme to make towards good workes, are as if a condemned man would make a large will, to charitable vses.⁵⁶⁾

更にベラルミーノは殉教者には罪がなく、その受難は十分な罪の償いであるから多くの罪の償いが殉教者から生じると言ったが⁵⁷⁾、そのために「功德の教義」が軽率な人間を「殉教というこの悪しき熱望」へと追いやりとダンにはベラルミーノを批判する。

And vpon this superabundant value of the merite of Martyredome, Bellarmine builds that conclusion, which wee now condemne, which is, *That beause many martyres haue but fewe sinnes of their owne, and their passion is of a large and rich satisfaction, a mightie heape of Satisfaction superabounds from martyrs.* And so they being sent hither, as Factors to encrease that banke and Treasurie, it appears, I thinke, sufficiently, that the doctrine of merites, dooth mis-prouoke and inordinatly put forward inconsiderate men, to this vitious affectation of Martyrdome.⁵⁸⁾

3番目の煉獄であるが、ジェズイットは殉教によって煉獄の苦痛は避けられると言ったがダンには煉獄を「ローマ教会の夢話及び宗教上の有益な作り話の道德的な適用」(the mythologie of the Roman Church, and a morall application of pious and useful fables)⁵⁹⁾と述べ、煉獄の神話性と寓話性を一蹴し、更には、「喜劇・悲劇的な煉獄教義」(Comique-Tragicall doctrine of Purgatorie)⁶⁰⁾とさえ言い、煉獄そのものをローマ・カトリック教会の全くの作り事として無視している。更に次の引用文では煉獄の教義には

推測上の信じられない不可能な作り事が混合していると言っている。

So did they (the Jesuits) all confesse, in the Doctrine of *Purgatory* so many mixtures of coniecturall, incredible, impossible fables, as might haue scandaliz'd and discredited any certaine trueth by their Addition.⁶¹⁾

このようにダンはジェズイットが殉教を行うにあたりその依拠した三つの考え—君主軽視、功德、煉獄—に反論し、いかにジェズイットが誤った考えに基き「忠誠の誓い」を拒否し、更には殉教を行うかを指摘し、彼らの「忠誠の誓い」拒否には正当性がないかを強調する。ダンはジェズイットの殉教偏好に対して反論を加えるがその反論は政治的・宗教的基盤に基づいている。特にジェズイットの「君主軽視」は両者の間では最大の論争で彼らの殉教行為が王の「忠誠の誓い」を無視し、結局は英国君主軽視を生みだし、それは父王とローマ教皇のいずれかに従うべきなのかという問題にまで行きつくのである。ジェームズ王朝支持者のダンとしてはまず王権の神からの由来について論じ、ジェームズ王同様王権神授説の立場をとり、ジェームズ王に従うことは極めて自然なことであると論ずる。功德、煉獄に関してはダンはカトリック教会を宗教の面から批判する。殉教という功德を重視することは言わば「善行」によって「救済」を得ようとするものであり、プロテスタント的な「信仰」(faith) 観とは真っ向から相対立するもので、ダンは功德重視は「キリストの受難」をないがしろにするものであることを強調するが、ダンのプロテスタント的な一面が(そしてアングリカン的な一面が)うかがわれるところである。又英国に來るジェズイットは何を目的に來るのかと言えば「いばらに釘とむちと槍の下で我々のために徐々に弱まっていく十字架にかけられたキリスト」(Christ crucified, laguing for us under the Thorns, Nayles, Whippes & Speares) のためではなく「司教の座につき、かぎと刀と王冠の重みの下で御し難くうめき苦しんでいるキリストの代理人」(his [Christ's] Vicar enthron'd and wantonly groning under the waight of his Keyes, and Swords and Crownes) を説くためだとダンは言っているが、⁶²⁾ キリスト教のそもその根源たるキリストをないがしろにし、ローマ教皇への偶像崇拝を重視する彼らの態度を鋭く批判している。

このようにダンは殉教を引き起こす誘因としてジェズイットの君主、功德、煉獄に対する態度を取り上げ、それらに批判、反論を加えるが、それらがほぼジェームズ王の見解と一致していることに我々は注目したい。

ここまでダンでは当時ジェームズ王朝及びヨーロッパ君主国にとって物議をかもしていたジェズイットの理論と実践を明確にし、彼らが一体何を考え、何を行なおうとしているのかそして彼らの理論と実践がジェームズ王朝及び英国にとっていかに危険であるかを読者に示した。これまでのところ「忠誠の誓い」とは関係がないように思われるが実は「忠誠の誓い」を無視しているジェズイットの正体を暴くことによってダンでは逆に「忠誠の誓い」がいかにジェームズ王朝にとって不可欠であることを示しているのである。ダンはまだジェームズ王の「忠誠の誓い」を十分には論じていない。ダンの論客としての一面がより明確になるのは「忠誠の誓い」と「服従」の問題を扱うときで、その問題を論ずることによりダンはジェームズ王支持の態度を疑いないものになることになる。

ジェームズ王の「忠誠の誓い」に対する見解は既に見たようにそれが「市民としての、世俗的な服従」であるから、国内のカトリック教徒が「忠誠の誓い」をとってもそれがローマ教皇の「霊的支配権 (spiritual jurisdiction)」に反せず、宗教的には何ら問題はないというものであったが、ダンもジェームズ王の『擁護』と『通告』に沿ったかたちで「忠誠の誓い」を擁護している。まず最初に「忠誠の誓い」の目的であるが、その意図は「反逆のなかに出た毒で腐敗した人たち」と「彼らよりはよい気質で王と英国の平和に対してより礼儀正しい愛情を持ち合わせているカトリック教徒」を区別することであるという。

...by which (a trial=the Oath of Allegiance) those which were corrupted with the poyson which broke out in those Treasons, might be distinguish'd from Catholickes of better temper and more duetifull affections towards him, [and our Peace,...⁶³]

又同様に「忠誠の誓い」の目的について「市民としての服従に良い感情を抱いている人達を宣言し、保護するために、既に反逆的な裏切りの気質を持っているかあるいはそれとは逆の誓いのような助力で守られ、引き止められなければそのような気質に傾き、陥るかも

しれない他の人達を区別するためである」と言うときダン明らかにジェームズ王の「忠誠の誓い」を念頭においていたことは疑いえない。

For this Oath (of Allegiance) is not offred as a *Symbol* or token of our Religion, nor to distinguish *Papists* from *Protestants*, but onely for a *Declaration* and *Preseruation* of such as are well affected in *Ciuilt Obedience*, from others which either haue a rebellious and treacherous dilposition already, or may decline and sinke into it, if they bee not vphelde and arrested with such a helpe, as an Oath to the contrary.⁶⁴

これはジェームズ王の『擁護』や『通告』のなかの「忠誠の誓い」は「過激なカトリック教徒」と「ジェームズ王に協力的なカトリック教徒」を区別するためであるという内容とほぼ一致している。一部過激なカトリック教徒は「忠誠の誓い」を拒否し、それを中傷し、王よりはローマ教皇に隷属しているという。ダンからすればカトリック教徒（この場合はジェズイット）の基礎と原理が「忠誠の誓い」拒否という反抗精神を生み出しており、そのような腐敗・墮落した人々には「より痛烈な激しい薬」(Medicines more corrosive and sharpe)を適応しなければならない。彼らは「忠誠の誓い」拒否により「自由」(libertie)を失い、その「頑固さ」によって「罰金と刑罰」を招いている。彼らの明白な根拠と強力な確信と不変の基盤による「忠誠の誓い」拒否以外は「忠誠の誓い」の目的への宗教的な熱意及び生命、名声、富を守る自然な義務から、このようなものを失う冒険を犯さないことはすべてのカトリック教徒の義務であると言う。

It is therefore the dutie of euerie Catholique, out of his religious zeale to the cause, drawne into suspition thereby, and out of his Naturall obligation for preseruing his life, fame, and fortune, all which are endangered by this refusal, not to aduenture the losse of these, but vpon Euidence of much clearenesse, and grounds of strong assurednesse, and constancie.⁶⁴

そして「忠誠の誓い」に対する疑念が現れ始めたがカトリック教徒のなかで議論、協議の末「忠誠の誓い」は合法的とみなされ、多くのカトリック教徒が「忠誠の誓い」をとったと言う。だから「自然」,「聖書」,

それに「そこ（自然と聖書）から必然的に引き出され出くる演繹と結論」(Deductions and conclusions necessarily derived and issuing from thence)によっても「忠誠の誓い」拒否による危険を招くに十分な確信はどんな良心にもなかったと言う。

And as it is certaine, that at the first promulgating of this oath, they had no such ground, nor Euidence (for then, that light must haue beene vpon them all, and so many good and earnest maintainers of that Religion, would not haue enclined to the Oath, if they had had such Euidence against it) so allso after some scruples were iniected, and the tendernesse of some consciences vitiated and distracted with some doubts, and that it had beene submitted to Disputation, and consulting amongst themselues, and so passed all those furnaces of Examination, it was held lawfull, and accordingly many tooke it. So that neither by the Euident and vndeniable authoritie of Nature, or Scripture, nor by Deductions and conclusions necessarily deriued and issuing from thence, any Conscience had sufficient assurance, to incurre these dangers.⁶⁵⁾

このようにどのような点からも見ても「忠誠の誓い」拒否はありえないとダンと言う。「自然」と「聖書」および「歴史」は当時の論争の最終的な拠り所であり、これらによっても「忠誠の誓い」はとられるべきであると言う。更に、ダンはジェームズ王に従う理由として「我々を平和と宗教のなかに保護しうる (preserve) 権力に従わねばならない」と言い、他方聖書の「すべての人は上に立つ権威に従うべきである」(ロマ書)を持ち出してくる。⁶⁶⁾ ダンによれば前者は「自然」によって知るところであり、後者は聖書の言葉である。又教父のロマ書解釈によれば、ロマ書で扱われている「権威」とは「教会権力」よりはむしろ「王・俗権」を意味している。それ故、ダンからすれば「忠誠の誓い」に反対する理由は見つからないのである。ダンは自然、聖書、歴史を盾にジェームズ王への服従の正当性を主張するが、次の一節でも自然、聖書、教父、行為と経験(歴史)により王への忠誠の正しさを知り、それに反駁することの出来るものはないと言う。

Now, in a man, in whom there are all these

iust *preiudices* and *prescriptions*, That *Nature* teaches him to obey him that can preferue him, That the *Scriptures* prouoke him to this obedience, That the *Fathers* interpret these Scriptures of *Regall power*, That subsequent acts, and *Experience* teaches, Regall power to be sufficient for that end; what can arise, strong enough to defeate all these, or plant a *knowledge* contrary to this, by any euidence so neere the first *Principles*, as this is grounded vpon?⁶⁷⁾

このような反論方法はすでに見たようにジェームズ王が『擁護』と『通告』のなかで使用していたものであり、ダンは王の著作を読んだ結果としてそのような反論方法を知っていたのであろう。ダンはこのように自然、聖書、歴史に依拠しつつ王の「忠誠の誓い」及び王への服従を論じ、支持するが、ダンからすればいかなる点からみても反論の余地はないはずである。それなのになぜローマ側は強硬にジェームズ王に刃向い、国内の秩序を乱し、王への服従を頑なに拒み、挙げ句の果てに王こそが教皇に服従すべきだと主張するのか。「忠誠の誓い」の問題は結局ジェームズ王とローマ教皇との権力争いにまで行き着く問題なのである。ジェームズ王は言うに及ばずダンも又『偽殉教者』のなかでその問題を論ずる。果たしてローマ側の「忠誠の誓い」拒否の根拠は何なのか。又王と教皇との主従関係はどうか。

4

ローマ側が君主を軽視する理由のひとつに聖職者が君主よりも地位が上だとする主張があり、これについては先に少し触れた。この問題はジェームズ王もその著作で度々論じていたことであり、最終的には王と教皇との権力争いにまで発展していく問題である。ダンはこの問題を「序論」と第三章で論じており、ジェームズ王を支持するにあたりどうしても論じておかねばならない重要な問題点であった。ダンはどのような論理で王と教皇の優位争いを論じ、いかにして王を教皇よりも高く評価しているのであろうか。

君主を軽視するにあたりローマ側は君主と聖職者との比較により、又比較を抜きにして職聖者の機能のバランスをとらず、論議することなく教皇に君主を越え

る「最高の 霊的君主」(Supreme Spiritual Prince)としての権威を与えている。最初の君主と教皇との比較によって教皇に優位を与えることについてダン・ジェームズ王以上に過去の君主や皇帝とローマ教皇との歴史を調べ、ローマ側が教会法の注釈によっていかに教皇が君主より優れていると主張しているかを説明する。ダン・ジェームズは両者の比較をするとき決してローマ教皇を否定するのではない。ダン・ジェームズはそれぞれにはそれぞれの領域があることを明確にする。ダン・ジェームズによれば神が注意を払うのは魂だけではなく「全体としての人間」(intire man)である。⁶⁹⁾ 神は我々を君主にのみ譲り渡したのではなく、又聖職者にのみ譲り渡したのではない。聖職者は我々が社会のために現世で「高潔に」、「潔白に」生きるように努めねばならないし、君主は彼の法によって天国への道の中に我々をとおめておかねばならない。両者がそれぞれのことを行うとき君主も聖職者も「王的な司教権」(regale sacerdotium)を成し遂げると言う。⁶⁹⁾ というのは我々は両者にとっていわば「羊」であり、君主も聖職者もそれぞれの異なる関係において互いの「羊」である。⁷⁰⁾ このようにダン・ジェームズは君主と聖職者の各々の領域をまず認めることから論を進める。両者が互いの勤めを果たすことにより我々は「高潔に」、「潔白に」現世で生き、天国への道を歩むことになる。ダン・ジェームズは決して君主のみとか聖職者のみとかというような偏狭な見解を抱きはしない。

『偽殉教者』でダン・ジェームズはしきりにカトリック教会特にジェズイットを批判するがカトリック教そのものを否定するのではない。ダン・ジェームズが最も激しく攻撃するのはローマ側が本来の自らの留まるべき場所を離れ、他の領域にまで足を踏み入れるときのみなのである。『偽殉教者』のなかでダン・ジェームズは非ローマ教徒ではない。ダン・ジェームズが最優先に考えているのはジェームズ王朝・英国の平和・秩序であり、ダン・ジェームズがカトリック教徒を攻撃するのは彼らが本来の宗教上の立場を離れ、政治社会と言った俗界にまで干渉するときなのである。

ダン・ジェームズは皇帝の司教としての教会問題処理、教義問題における指示は皇帝の法、教皇への布告、皇帝への教皇の書簡に十分に明白に表れていると言ひ、歴代の皇帝達が教会問題に関係してきたことを主張する。シャルマニユ大帝(Charles the Great)、レオ一世(Leo I)等皇帝、教皇、宗教会議からダン・ジェームズはいかに皇帝が神学・宗教上の種々の問題点と深く関わってきたかを明らかにする。更には宗教会議が権威や欠点を補うために

皇帝に「布告」(Decrees)を提出したこと、教皇が前以て書簡で皇帝と困難な問題について相談したこと、皇帝が教皇の協力者であったこと、⁷¹⁾ 皇帝の教会支配、聖職者の選定、聖職授与の年齢決定、再婚女性の助祭就任不可、更には皇帝の信仰問題における命令、教授、皇帝が教会人への現世的な罪のみならず、霊的な非難も与えたこと、世俗権力と教会権力の距離を認めず、両者は両立出来ると考えた皇帝達を例に上げている。

By all which it appeares, that those Christian and Orthodoxe Emperors, iustifying their inherent right, by these frequent and vn-interupted matters of fact, apprehended not this vast and incomprehensible distance betweene secular and ecclesiastique power, but that they were compatible enough, and conduced, and concurred to one perfection, and harmony of the whole state.⁷²⁾

そして聖と俗の二つの機能はその性質上異なるものでも、全く相反するものでもなく、一つの問題、一人の人にとっては両者は触れ合い、一人の人が両者を成しうると言う。

For certainly these two functions are not in their nature so distinct, and Diametrically opposed, but that they may meete in one matter, yea sometimes in one man, and one man may doe both:⁷³⁾

このようにダン・ジェームズは聖俗の二つの権力が一人の人間に存することを認め、結果として王が宗教的に権威を振るっても問題はないと言う。更にダン・ジェームズはカトリック教の法律者の「王はすべて聖職者であり、王の権威を論ずることは神聖冒瀆である」(all Kings are clergie men, and that therefore it is sacriledge to dispute fo the authority of a King)を引用さえしている。⁷⁴⁾ このようにダン・ジェームズは王の神聖、宗教的な種々の問題を行うことに疑問を呈しはしない。聖と俗の機能はキリスト教創設以来別個のものとして守られき、またそうあるべきだが、肉体と魂のように別個である。魂はそれ自身で神を黙想できるが、肉体なしでは何も「外的行為」(exterior act)を産み出すことは出来ない、と言う。⁷⁵⁾ 肉体と魂の相互依存を説くダン・ジェームズは初期の恋愛詩の魂と肉体との融合からなる彼の愛の理論を考えずにはいられない。魂だけでは実際には何も

成し得ず、肉体を使用して初めて魂もより深い意義を帯びてくるのであるが、ダンは王という一人の魂と肉体を兼ね備えた人間のなかでこそ真の意味において宗教的な事が可能であると言うのである。

ダンのこれまでの論点は要するに君主にも聖職者にもそれぞれの領域があること、そして君主は本来聖職者にまで影響を及ぼし、宗教的な様々な行為をなしてきたというものである。だから聖職者は君主に従うべき者であり、魂と肉体が相互協力し合って初めて意義ある存在となるように、聖と俗がそれぞれ別個のものであるよりは一致した場合により意義ある実体を産み出すことが出来ると言う。このようにダンは君主の聖職者への優位を説き、過去の王と教皇との歴史を振り返り、君主が宗教的職務を遂行しても問題はないことを主張する。しかしその逆の聖職者が俗事に介入することに関しては歴史的に見てもその先例はないという。教皇に関して教皇は最初は「単なる魂」で「純粋に霊的であった」が、その純粋な魂が肉体に触れるや否や罪に汚れ腐敗するように、教皇は俗事に介入することによって「俗事のすべての腐敗と醜悪さ」を身に付け、今ではこの「初期の病」を後継者に移していると言う。⁷⁶⁾ このように本来教皇はそもそも霊的な問題に専念すべきなのに君主廃位という俗権を教皇に付与するためにカトリック教会は教皇に「肉体的・世俗的支配権」を与え、教父及びカトリック教会もその意見であったと断言していると言う。

So though in true Diuinitie the Pope is merely spiritual, yet to enable him to depose Princes, they will inuest and organize him with bodily and secular Iurisdiction, and auerre that all the Fathers, and all the Catholicke Church were euer of that opinion.⁷⁷⁾

王廃位権は元来教皇にはなかったが後になってローマ教会が俗事に介入する口実として教皇に王廃位権を付け加えたダンとは考えている。だから教皇は今や単なる「魂」や「霊」ではなく「霊の人で、すべての人を判断するが誰によっても判断されることはない」⁷⁸⁾ という聖書の言葉によって教皇が王を廃位することを可能にしているのである。教皇の王廃位権についてのダンの根本的な見解はこのようにそれが教皇の越権行為であり、本来の教皇の職務としては教皇には存在しなかったものと考えている。魂と肉体が一致すればそれは君主の場合は良い結果を生み出すが、教皇の場合に

は両者の結合はむしろ否定的な結果をもたらすことにもなりかねない。そのひとつが王廃位権であり、もうひとつがジェームズ王とも密接に関係してくる破門である。王廃位権同様破門に関してもダンにはローマ教皇・カトリック教会に対して容赦のない厳しい態度をとる。ダンによれば魂が肉体に入ったあと、つまり霊的支配権が俗的支配権に入った後それはどちらの権力もそれだけではなしえない結果を生み出し、教皇の破門は王廃位権同様元来は教皇には存在しなかったのである。

So, after this Soule is entred into this Body, this spirituall Iurisdiction into this temporall, it produces such effects, as neither power alone could worke, nor they naturally would vnite and combine themselues to that end, if they were not thus compressed, and throng'd together like wind in a Caue. Such are the thunders of vniust Excommunications, and the great Earthquakes of transterrng Kingdomes.⁷⁹⁾

ダンによれば王の子孫には神の力の印と刻印により威厳が付与されており、⁸⁰⁾ そのような王に対して破門を与える教皇は正に神に対して罪を犯しているのと同様である。ダンの王権神授説擁護の一端をうかがわせてくれるこの一節はジェームズ王と同じ立場に立ち、ジェームズ王を意識した発言であると言わねばならない。

ダンには又聖職者の君主への態度を過去にさかのぼり詳細に調べるが、皇帝や彼の妻の手紙が「神聖なもの」(Divales), 「神聖な手紙」(Sacrae literae), 「神聖な韻文」(Divinae syllabae) の名前で受け取られたと言い、又フェリックス三世 (Felix III) はゼノ (Zeno) 皇帝に対して自らを「奴僕」(Famulum), 「奴隷」(Seruum) と呼んだとか、グレゴリー一世 (Gregory I) がモーリス (Maurice) 皇帝に対して自らを「奴僕」, 「奴隷」と呼び、さらには「私がこのように私の諸君主と話をする間、私はちりと虫けら以外の何であるのか」(While I speake thus with my Lords, what am I, but dust and worms?) と付け加えたりして、皇帝が教皇よりも上位にあったことを示している。そして歴代の皇帝に対して教皇は「好意的で」(agreeable), 「従順で」(appliant) であったと言っている。⁸¹⁾ その他ダンにはローマ司教が東ローマ皇帝に援助を求めたことも例に挙げ、教皇と皇帝との関係を明らかにしている。教皇と皇帝との関係はこのように教皇が君主

に従うという形で進んできたがグレゴリウス七世 (Gregory VII) が登場してから両者の関係に溝が入り始める。彼の時代の破門では霊的非難以外にも世俗的な罰が与えられ、結果として君主に対して「根絶」(eradication) が与えられると言うものであったが、良く調べてみると霊的処罰しか与えられていないことがわかる。⁸²⁾ ダンはインノケンティウス一世 (Innocent I) のアールケイウス (Arcaaius) 皇帝への書簡を取り上げているが、インノケンティウス一世は皇帝からだ「霊的な食べ物」(spirituall food) を奪っているだけであると言う。⁸³⁾ 或はエペソ宗教会議での教父達は魂に危害をもたらさない限りにおい王に服従したと言っている。⁸⁴⁾ ローマ側の破門についてダンは結局それは多くの形式と儀式を伴って行われ、世俗的な処罰、没収、押収に及んでいると言う。

So that whether this farther punishment were no other, then that which is now called *excommunicatio Maior*, or that which is called in the Canons *Anathema maranatha*, the denouncing of which, and the absolving from it, was acted with many formalities, and solemnities, and had many ingredients, of burning tapers, and diuers others, to which none could be subiected without the knowledge of the Arch-Bishoppe, it appeares that it now here extends to temporall punishment, or forfeitures and confiscations.⁸⁵⁾

教皇の破門に関してはグレゴリウス七世がそれまでの形式的な破門から世俗的な処罰にまでその支配権を行使し、神聖ローマ帝国ハインリッヒ四世 (Henry IV) を破門したのであるが、その破門は「怒りにまかせたもの」(cholérique) であり、⁸⁶⁾ 多くの「法外な権利侵害と憎むべき放縦」(enormous usurpations, and odious intemperance) があったといい、⁸⁷⁾ それが単なる感情的なものにすぎず、何ら正当性がその破門にはないことを指摘している。グレゴリウス七世がそれまでの教皇の支配権を俗権にまで拡大し、君主を破門し、君主の臣民に赦免可能だとしたが、その裏付けはマタイ伝のイエスのシモンへの「あなたはペテロである。わたしはあなたに(天国の)かぎを授けよう、あなたが地上でつなぐことは、天でもつなぐがれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」(Tu es Petrus, Tibi dabo Claves, Quodcunque

igaveris) である。⁸⁸⁾ この一節は教皇をペテロの後継者と考え、二つの鍵の授与から教皇には聖と俗の二つの権力があったことを証明するためにローマ・カトリック教会がよく利用した箇所である。グレゴリウス七世の教皇優位のもう一つの根拠はゲラシウス (Gelasius) 教皇の「聖職者は君主より上位にあり、ローマ司教が主教である」(Priest-hood is above Principality, and that the Bishop of Rome is the chiefe Priest.) である。⁸⁹⁾ ダンはこれに対し、「ローマ司教はいくかの職務においてはすべての者より上位にあるかもしれないが、世俗的職務においてはそうではない。」(Bishop of Rome may be above all, in some functions, yet not in temporall) と言い、⁹⁰⁾ 教皇の俗権を否定する。グレゴリウスはユリウス教皇 (Julius) の「私(イエス)はあなた(シモン)に(天の)かぎを授けよう」(Tibi dabo Claves) 解釈を援用するが、その解釈「天を開く者は地を裁くのではないか」は王の廃位を正当化すると同じ位にすべての「裁判権」(Judicature), 「君主権」(Magistracie) を破壊するものではない、ユリウスの極端な解釈に反論している。⁹¹⁾ グレゴリウスはこのように君主は聖職者によって廃位されうるとするが、その証拠は王がどのようにして始まり、どのようにして制定されたかの多様性にあるという。例えば王は「人間の思いがかり (pride)」によって「聖職者は神聖な敬虔 (divine pietie)」によって作られたと言う。⁹²⁾ そして「聖職者は君主に優る理解しがたい距離と釣合いの中にいる」(priesthood is in an incomprehensible distance and proportion above principality) とさえ言い、⁹³⁾ 君主への優位を信じて疑わない。グレゴリウスは王が教皇より劣っている理由として更に王には救われた者がほとんどいなかったし、王が奇跡を行うことはなかったと言っている。⁹⁴⁾ グレゴリウスは王の威厳を自分の用途に合わせていいなりにし、役に立たせ、さもなくば王の威厳をこなごなにするのである。又グレゴリウスはその命令の中で教皇のへ王の優位を次のように主張し、彼を支持した者もいると言う。

And where could our later men find better light in this mischeiuous and darke way, then in this *Gregories Dictates*, of which, these are some, *That onely the Pope may vse Imperiall Ornaments; That all Princes must kisse his feete: That onely his Name must be rehearsed*

*in the Church; That there is no other Name in the world, with many such transcendencies. And accordingly he is wel seconded by others, which say, that he is Superillustris; and may not be cald so neither, because he is so much about all Dignitie, that our thought cannot extend to his Maestie: And to preuent all opposition against it, Baldus in a choler sayes, That he that sayes the contrarie, Lyes.*⁹⁵⁾

グレゴリウス七世の王への態度は極端で彼は教皇の権力を高く評価しすぎ、王に対して敵意すら抱いているように思われるほど教皇の圧倒的なまでの優位を主張する。その理由のひとつは王権が人間に由来し、それ故神聖に欠けるといふことがある。ところがダン王は王権も霊的権力同様神聖であり、王権への侮辱は（例えば「忠誠の誓い」の拒否）は「治安妨害」であり、それは死によって罰せられるものであり、「治安妨害」のための死は神のための死ではなく、まさに「偽殉教」であると考えているのである。そもそもローマ側は王権と教会権力に関して一方が神から間接であり他方が直接的であるとみなすが、教会権力が「変更」や「中断」を受けない「教権制度」(Hierarchy)を神が定めるほど直接的に神に由来するのではないし、又俗権もそれがいかなる時にも消滅されるほど間接的でもなく又人間に依っているのでもない。

And from hence also hath growne that Distinction, Superstitious on one part, & Seditious on the other, of Mediate and Immediate institution of the two powers: for Ecclesiastique authority is not so immediate from God, that he hath appointed any such certaine Hierarchy, which may vpon no occasion suffer any alteration or interruption: Nor is secular authority so mediate, or dependant vpon men, as that it may at any time be extinguished, but must euer reside in some forme or other.⁹⁶⁾

そしてベラルミーノを引用しながら王の威厳には司祭の威厳と同じ程神からの威厳があるという。

And Bellarmine himselfe confesses, That as Aaron was made Priest ouer the Iewes, and Peter ouer the Christian Church, immediately from God, so also some Kings haue. beene wade so immediately without humane election,

*or any such concurrence: So that Regal Dignity hath had as great a dignification in this point from God, as Sacerdotall;*⁹⁷⁾

ダンの王権擁護の最大の論拠はまさに王権の神聖である。ジェームズ王を引き合いに出すまでもなく神聖な王権はジェームズ王の王権神授説と通ずるものであり、ダンがそれを念頭においていたことは疑いない。次の一節でも権力は神から由来すると言っている。

Certainly all power is from God; And as if a companie of *Sauages*, should consent and concurre to a ciuill maner of liuing, Magistracie, & Superioritie, would necessarily, and naturally, and Diuinely grow out of this consent (for Magistracie and Superioritie is so naturall and so immediate from God, that *Adam* was created a Magistrate, and he deriu'd Magistracie by generation vpon the eldest Children, and (as the Schoolemen say) if the world had continued in the first Innocency, yet there should haue beene Magistracie.) And into what maner and forme soeuer they had digested and concocted this Magistracie, yet the power it-selfe was *Immediately* from God:⁹⁸⁾

ダンは大抵宗教会議の「王国は人間によってではなく神によって与えられる」という言葉を引用し、更には次のようにも言う。

There it is said, *Let no King thinke that the Kingdome was preseru'd for him, by his Progenitors, but he must beleue that it was giuen him by God. For he which is King of men, had not this Kingdome from men, but from God.*⁹⁹⁾

これに対し、ローマ教会は聖書を歪曲したり、キリストや神の名を教皇に付し、教皇の神聖さを強調する。ローマ教会は「敬けんな虚偽」(piae fraudes)¹⁰⁰⁾によつて「神の聖書と神の霊についての言い回しの悪意に満ちた、伝染的な傷つけ」(venomous & contagious wounding the scriptures of God, & the phrase of his spirit)¹⁰¹⁾を塗りつけるのである。ローマ教会側は聖書の歪曲、こじ付けによってまで王権を軽視する。例えば詩編91:13に「あなたはししとまむしとを踏み、若いししとへびとを足の下に踏みにじるであろう」と書かれているが、アレクサンドル

(Alexander) 教皇はこの一節によってフリードリッヒ (Fredericke) 皇帝を踏みつけ、又シクストス (Sixtus) 五世の司教は教皇の足へのせつぶんをイザヤ書 49:23の「王と女王は顔を地に付けてあなたを礼拝し、あなたの足のちりをなめる」により、あるいはルカ伝 7:45や申名記 1:3からも同様に王は教皇にひれふし、足にせつぶんしなければならないとする。聖書をこのように教皇の地位を高めるのに利用する。詩編の「よろずのものをその足の下におかれました」は元もとは人間への動物の服従について言われたものだが、ローマ教会側は教皇に対する人間の服従に解釈する。¹⁰¹ 又、ルカ伝 22:38の「二つのつるぎを ごらんない」(Ecce duo gladii) から教皇には聖・俗の二つの権力があるという。¹⁰² このほかにも使徒行伝 10:13の「はふって食べなさい」(Macta & Manduca) について、それは本来異邦人の洗礼について言われたものであるが、バロニアス (Baronius) はキリスト教徒の破門と解釈している。¹⁰⁴ ただ皮肉なことにローマ教会側はみずからの「煉獄」(Purgatory) く「祈願」(Invocation) や「全質変化」(Transubstantiation) については聖書から証明は出来ないのである。¹⁰⁵ このようにローマ教会は聖書のこじつけ、歪曲によって教皇の王への優位を主張するがそれはあくまでも歪曲であって何ら正当性は見い出されないのである。ダンによれば聖書は君主の任務と威厳に反対するローマ・カトリック教会に役立たねばならず、君主をその隣人のえじきとして、臣民の物笑いとして示すのである。¹⁰⁶

ダンはこのようにローマ教会の聖書の歪曲を批判する。ローマ教会は手段を選ばずあらゆる手を使って教皇の王への優位を主張する。ダンは今まで見てきたようにジェームズ王同様過去の教皇と王との関係の詳細な吟味、又聖書に対するかれらのこじつけへの批判から教皇の俗権に反論する。王廃位、破門、といったローマ教会の越権行為をダンでは詳細な歴史上の資料によって論破し、ジェームズ王を擁護することを忘れない。ローマ教会の俗事への介入はダンからすれば「錬金術」に等しく、あらゆるものをローマ教会は「靈的に」するのである。

And not onely all these persons, but all which appetaines to them, becomes spirituall: and by a new *Alchemy*, they doe not onely extract spirit out of euery thing, but transmute it all into spirit, and by their possessing them,

Houses, Horses, and Concubines are spirituall.¹⁰⁷

ダンは初期の恋愛詩でしばしば卑金属を金に変えると言われた錬金術を冷静な眼で見つめ、「ペテン」であると言ったことがあるが、ローマ教会の俗事への干渉、介入を「新しい錬金術」とみなし、ローマ教皇の俗権を一蹴するのである。ダンの教皇の俗権に対する態度は終始変わることなく、教皇に元来俗権があったかどうかは疑わしく、いかにしてその俗権が教皇の手に入ったのか、いかにして俗権を教皇が行使するのかは説明できないことだと本書の序文で言っている。

For as no Artist can finde out, how this malignant strength growes in that poyson, nor how it works, So can none of your writers tell, how this temporall Jurisdiction got into the Pope, or how he excuses it, but are anguished and tortured, when they come to talke of it,...¹⁰⁸

ところがいつの間にか教皇の俗権 (temporall jurisdiction) 信仰問題となってしまったのと言う。

So hath the Romane faith beene for many yeares, fedde and pampred with this venomous doctrine of temporall jurisdiction, that it is growne to some few of them to bee matter of faith it selfe;¹⁰⁹

ローマ側はこの俗権を盾にジェームズ王の「忠誠の誓い」にまで立ち入り、英国内のカトリック教徒に「忠誠の誓い」拒否を勧め、挙げ句の果てにジェームズ王を破門し、廃位するが教皇のそのような行為は聖書には見い出されないのである。

Nor doe they for this *Timpany*, or *false conception*, by which *spirituall* power is blowne vp, and swelled with *temporall*, pretend any place of *Scripture*, or make it so much as the putatiue father thereof. For they doe not say, that any place of *Scripture* doth by the literall sense thereof, immediatly beget in vs, this knowledge, *That the Pope may depose a Prince*; but all their arguments are drawne, from naturall *reason*, and *discourse*, and *conueniencie*.¹¹⁰

ダンの王と教皇との優位論争に関しては以上のように何はともあれ王権の神聖がその根底にあり、そこか

ら教皇権の由来への疑問、更には教皇の俗権の否定へと論が進められている。王権は教皇権と比較して少しも劣るものでなくむしろ教皇権に匹敵し、否それを凌駕するものであるという。ダンはこの問題を論ずるにあたりジェームズ王以上に過去の歴史を調べ、聖書にあたり、王権の優位を強調している。しかしジェームズ王が単に過去の歴史と聖書を頼りに王権の擁護を説いたのに反し、ダンのほただそれだけで終始するのではない。ダンにはジェームズ王にない論理を展開し、又ジェームズ王が論じなかった問題点をも扱い、王を支持する。英国人の忠誠観とローマ側の教皇への服従との比較、教皇の間接権力説（これにより教皇の俗権が可能になる）、殉教行為を保証する教会法批判、教皇教書の誤謬、更には国家破壊者への新しい「誓い」の必要性等ダンが論じている問題点は残っているがそれらについては稿をあらためて論じたい。

注

- 1) 本論ではジェームズ一世の著作に関しては C. H. McIlwain (ed.): *The Political Works of James I* (New York: Russell & Russell, 1965), またダンに関しては John Donne: *Pseudo-Martyr* (New York: Scholars' Facsimiles & Reprints, 1974) をそれぞれ使用する。
- 2) McIlwain, *op. cit.*, pp. 73-4.
- 3) *Ibid.*, p. 74.
- 4) *Ibid.*, p. 74.
- 5) *Ibid.*, p. 74.
- 6) *Ibid.*, p. 74.
- 7) *Ibid.*, pp. 71-2.
- 8) *Ibid.*, p. 74.
- 9) *Ibid.*, p. 77.
- 10) *Ibid.*, p. 79.
- 11) *Ibid.*, p. 79.
- 12) *Ibid.*, p. 82.
- 13) *Ibid.*, p. 83.
- 14) *Ibid.*, p. 85.
- 15) *Ibid.*, p. 86.
- 16) *Ibid.*, p. 86-7.
- 17) *Ibid.*, p. 87.
- 18) *Ibid.*, p. 87.
- 19) *Ibid.*, p. 87.
- 20) *Ibid.*, p. 107.
- 21) *Ibid.*, pp. 108-9.
- 22) *Ibid.*, p. 109.
- 23) *Ibid.*, p. 113.
- 24) *Ibid.*, p. 116.
- 25) *Ibid.*, p. 116.
- 26) *Ibid.*, p. 118.
- 27) *Ibid.*, p. 118.
- 28) *Ibid.*, pp. 118-9.
- 29) *Ibid.*, pp. 118-9.
- 30) *Ibid.*, p. 120.
- 31) *Ibid.*, p. 121.
- 32) *Ibid.*, p. 128.
- 33) *Ibid.*, p. 149.
- 34) *Ibid.*, p. 127.
- 35) *Ibid.*, p. 153.
- 36) *Ibid.*, p. 152.
- 37) Donne, *op. cit.*, The Preface 3.
- 38) *Ibid.*, The Preface 28.
- 39) *Ibid.*, p. 170.
- 40) *Ibid.*, p. 173, 182.
- 41) *Ibid.*, p. 171.
- 42) *Ibid.*, Preface 3. 又 p. 189をも参照。なおこの点についてはジェームズ王も同じ見解である。(McIlwain, *op. cit.*, p. 102参照)
- 43) Donne, *op. cit.*, The Preface 27.
- 44) *Ibid.*, The Preface 28.
- 45) *Ibid.*, The Preface 22.
- 46) たとえばジェズイットの国家と教会の破壊についてダンは次のように言う。“...these pratique Monkes (the Jesuits) thought it belonged to them, to put it (Gun-powder) into use and execution, to the destruction of a State and a Church;”(The Preface, 26)
- 47) *Ibid.*, The Preface 26.
- 48) *Ibid.*, p. 15.
- 49) *Ibid.*, pp. 168-9.
- 50) *Ibid.*, p. 81.
- 51) *Ibid.*, p. 167. 又 p. 170をも参照。見方によっては第六章全体が王権神授説とジェズイットの反王権神授説（民衆からの権力委譲による王権説）との比較であると言ってもよい。
- 52) *Ibid.*, pp. 169-170.
- 53) *Ibid.*, p. 83.

- 54) *Ibid.*, p. 168.
- 55) *Ibid.*, pp. 97-8.
- 56) *Ibid.*, p. 98. 「功德」がキリストの受難を無視する教義であることをダンは再三批判する。たとえば“...there appear'd in the Doctrine of Merit,... many abominations, derogatorie to the Passion of our Blessed Saviour;”(p. 137) を参照。
- 57) *Ibid.*, p. 104.
- 58) *Ibid.*, p. 105.
- 59) *Ibid.*, p. 106.
- 60) *Ibid.*, p. 108.
- 61) *Ibid.*, p. 137. 想像の産物としての煉獄観はジェームズ王のそれと同じでジェームズ王は、煉獄の緑の草地に小川が流れていればそこでたか狩りをすると言い、我々の罪にとってはキリストこそが真の煉獄であると言っている。(McIlwain, *op. cit.*, pp. 125-6参照)
- 62) Donne, *op. cit.*, p. 156. 又次のようにも言っている。“But the mission from Rome is not to Preach Christ, bus Vicar: Not his kingdom of Grace, or Glorie, but his title to Temporall kingdomes:”(p. 153)
- 63) *Ibid.*, p. 223.
- 64) *Ibid.*, pp. 223-4.
- 65) *Ibid.*, p. 224.
- 66) *Ibid.*, p. 225.
- 67) *Ibid.*, p. 240. 又 p. 182では“...obedience to Princes is taught by Nature, and affirm'd and illustrated by Scriptures.”と言っている。
- 68) *Ibid.*, p. 17.
- 69) *Ibid.*, p. 17.
- 70) *Ibid.*, p. 17.
- 71) *Ibid.*, p. 21.
- 72) *Ibid.*, pp. 27-8.
- 73) *Ibid.*, p. 28.
- 74) *Ibid.*, p. 30.
- 75) *Ibid.*, p. 30.
- 76) *Ibid.*, p. 31.
- 77) *Ibid.*, p. 32.
- 78) *Ibid.*, p. 32.
- 79) *Ibid.*, pp. 32-3.
- 80) *Ibid.*, p. 34.
- 81) *Ibid.*, pp. 57-8.
- 82) *Ibid.*, pp. 62-3.
- 83) *Ibid.*, p. 63.
- 84) *Ibid.*, p. 64.
- 85) *Ibid.*, p. 66.
- 86) *Ibid.*, p. 66.
- 87) *Ibid.*, p. 68.
- 88) *Ibid.*, p. 71.
- 89) *Ibid.*, p. 71.
- 90) *Ibid.*, p. 81.
- 91) *Ibid.*, p. 71.
- 92) *Ibid.*, p. 75.
- 93) *Ibid.*, pp. 75-6.
- 94) *Ibid.*, p. 76.
- 95) *Ibid.*, p. 78.
- 96) *Ibid.*, p. 81.
- 97) *Ibid.*, pp. 81-2.
- 98) *Ibid.*, p. 82.
- 99) *Ibid.*, p. 85.
- 100) *Ibid.*, p. 88.
- 101) *Ibid.*, p. 88.
- 102) *Ibid.*, p. 91.
- 103) *Ibid.*, p. 91.
- 104) *Ibid.*, pp. 91-2.
- 105) *Ibid.*, p. 92.
- 106) *Ibid.*, p. 92.
- 107) *Ibid.*, p. 94.
- 108) *Ibid.*, The Preface 15.
- 109) *Ibid.*, The Preface 16.
- 110) *Ibid.*, p. 365.